



NEWSLETTER

International Lake Environment Committee

＝財団法人 国際湖沼環境委員会＝

このニュースレターには、英語バージョンもあります。

第12回世界湖沼会議の概要 (インド、ジャイプール)



第12回「湖の保全と管理に関する国際会議」(通称“世界湖沼会議”)は2007年10月28日～11月2日にわたって、ジャイプール(インド)で開催され、成功裏に閉幕した。会議はインド政府森林環境省によって主催された。

今回の世界湖沼会議は、変化に富んだ気候と多彩な水利用が行われている南アジアで開催された最初の会議であり、ラジャスタン州を訪れた会議参加者にとって、一年の間に降雨量が大きく変動するこの地で、古代と現代の文明がどのように水問題に取り組んできたのかを直接見聞する良い機会となった。

ジャイプールは、これまでの世界湖沼会議の開催地のうちで、最も年間の降雨量の変化が大きく、一年の数ヶ月の間に集中的に雨が降る場所である、という点で興味深い。このような条件

に適応するための対策(現地で“タンク”と呼ばれ、国中でくまなく建設されている貯水池もその一つ)をみて、59カ国、600人の参加者は、今後取り組むべき重要な課題として統合的湖沼流域管理について学ぶことができた。

会議の詳細は、日々のレポートを含め、同会議のホームページを参照ください。

●<http://www.taal2007.org/index.asp>

以下に会議のハイライトをいくつか紹介する。

会議はインド大統領Smt. Pratibha Devisingh Patilの挨拶で始まった。大統領は参加者を歓迎するとともに、インドの古代詩人‘Rahim’が水の重要性について述べた言葉「水は命であり、命は水なくしてありえない」を引用して湖と湿地保全の重要性を強調した。

開会式では、ラジャスタン州知事、インド森林環境相、などの挨拶もあり、続いて行われた全体会議では、インド政府企画委員会委員V. L. Chopra教授、京都大学名誉教授松井三郎、テキサス州立大学ウォルター・ラスト教授の特別講演があった。

3日目の午後には現地査察が実施された。参加者は、マンサガール湖を訪れ、同湖の問題と復興の取組みについて説明を受けるとともに、意見交換を行った。

会議の公式かつ重要な成果となったジャイプール宣言は会議を通じて議論され、最終日に発表された。同宣言は、これまでの世界湖沼会議の宣言、びわ湖宣言(1984年、2001年)、霞ヶ浦宣言(1995年)、ナイロビ宣言(2005年)と並ぶものである。ジャイプール宣言が統合的湖沼流域管理を推進する手段の一つになることを期待するものである。宣言の詳細はホームページを参照してください。

●http://www.taal2007.org/jaipur_declaration.asp

最終日には次回第13回世界湖沼会議の開催地となる中国武漢の代表者から歓迎の挨拶があり、会議は終了した。中国での世界湖沼会議の開催は杭州(1990年)に続いて2度目である。第13回世界湖沼会議は2009年11月1～5日に開催が予定されている。詳細はホームページを参照ください。

●<http://www.ilec.or.jp>

今号の トピック

- 第12回世界湖沼会議の概要
- 統合的湖沼流域管理と流域ガバナンス
- 新しい科学委員会がスタート
- 新旧科学委員長のメッセージ
- 世界の湖 フセインサガール湖(インド)

- JICA統合的湖沼流域管理研修コース
- 第12回世界湖沼会議 ILEC主催セッション
- 2007年 ILECの活動
- いつもご寄付・ご協力ありがとうございます！

統合的湖沼流域管理と流域ガバナンス

統合的湖沼流域管理（ILBM）とその必要性

多くの要素が複雑に絡み合っている湖沼資源の利用と保全のあり方を見直し、持続可能な形に変えていくためには、そのきっかけとなる手がかりが必要である。その方法として、統合的水資源管理（Integrated Water Resources Management, IWRM）や統合的河川流域管理（Integrated River Basin Management, IRBM）などが提唱されている。これらの考え方は湖沼の管理にもあてはまるが、湖沼にとって重大な「エコシステムサービスの長期的な変遷を踏まえた取り組み」と「静水システムの特徴を反映した取り組み」という課題が、いずれの計画概念にも十分反映されていない。したがって、このような特徴に十分配慮した概念として「統合的湖沼流域管理（Integrated Lake Basin Management, ILBM）」の概念がGEF-LMBIプロジェクトの成果として提唱されることになった。

GEF-Lake Management Initiative Project：このプロジェクトは、地球環境ファシリティ（GEF）が資金を提供したわが国初のプロジェクトで、41カ国28湖沼を対象とし、多くの国際機関・政府機関・非政府組織・学術研究機関の協力と世界銀行・オランダ水パートナー計画、GEF、国際湖沼環境委員会（ILEC）、滋賀県（日本）、合衆国国際開発機関（USAID）の財政支援の下で遂行された。3回のワークショップには288人が参加し、準備された湖沼の概要書と共通課題ペーパーをベースに統合的な湖沼流域管理のあり方について議論した。

世界の湖沼流域管理の 経験から生まれたILBM

世界の湖沼の資源開発や保全をめぐる取り組みの段階は様々である。ある湖沼は資源開発の初期段階にあり、別の湖沼では環境の悪化による資源価値の低下に悩んでいる。そしてまたある湖沼では保全・回復に向けて取り組みを進めている。資源価値と環境の状態がどの段階にあっても、湖沼が流域の様々な自然環境や人間活動の影響を受けて変化し続けていく点では共通しており、統合的湖沼流域管理の考え方はいずれのケースについても重要である。

GEF-ILBMプロジェクトではその結論として、

- 湖沼の管理は流域の管理である
- 湖沼流域管理には国境や行政区界を超えた取り組みが必要である
- 多くの湖沼で流域管理がうまく行かない原因の一つとして、実行の伴わない法規制が挙げられる
- 流域管理には、科学的な知見に基づいた対策技術を導入する必要がある
- 湖沼流域管理には、国の政策に基づいた長期にわたった取り組みが不可欠である
- モニタリングや因果関係を究明する調査研究なしに、湖沼流域管理はできない
- 湖沼流域管理はプロジェクトではな

く長期にわたったプログラムである

- 利害関係者が意思決定に参加していない場合には流域管理は成功しない

などをあげ、各湖沼における取り組みの教訓と課題を、①組織・体制、②制作と社会ルール、③住民や利害関係者の参加と協力、④適切なレベルの技術的対応、⑤情報・科学的知見と歴史

的に形成されてきた知恵、⑥財源と財政的仕組み、の6つの課題分野に分類して集約した（図1）。これらは、個々の住民から政府まで公私の区別なく協力しあって課題に取り組む上で不可欠な「流域ガバナンス」の向上を統合的に推進する政策の枠組みといえることができる。



図1 統合的湖沼流域管理の6つの要素

統合的湖沼流域管理は、湖沼と流域の管理を任された組織や利害関係者（ステークホルダー）が、湖沼がもつ静水システムの特徴を踏まえた上で、その資源の持続可能な利用と保全を実現するための必要な枠組みである。世界の湖沼環境資源の改善は、長期にわたる強力な政治的コミットメントの下で、組織体制や仕組み、政策の枠組みや法制度、利害関係者の参加、

科学的知見、技術的取組みの可能性と限界、持続可能な財源の調達に取り組み I L B M を推進することで初めて可能となる。

一方、湖沼流域管理には、従来のように政府が中心的な役割を果たして社会の問題を解決する「統治」ではなく、パートナーシップやネットワークなど、公式・非公式の多様な社会的仕組みを生かし、緩やかな幅広い取り組みを推

進する仕組み、すなわち「協治（ガバナンス）」の必要性が認識されるようになってきた。I L B M が求めるガバナンスは、湖沼のエコシステムサービスのうち、とくに生物育成の場、良好な水質、洪水・渇水中オキソ機能、気象の緩和などの調整的サービス機能を低下させることなく維持する、あるいは持続的な回復を可能とするものでなければならない。

I L E C の新しい科学委員の紹介

2007年4月～2010年3月期の科学委員が下記のとおり決まりました。これらの科学委員は2006年8月20日と25日に開催された I L E C 科学委員会総会で選任され、I L E C の理事会（2006年12月20日開催）で正式に承認されました。

第9期の科学委員（2007年4月～2010年3月）

	氏 名	出身国	所 属・タイトル
委員長	中村正久	日 本	滋賀大学環境総合研究センター教授
副委員長	ウォルター・ラスト	米 国	テキサス州立大学准教授、水科学局局长
副委員長	クリス・H. D. マガツア	ジンバブエ	ジンバブエ大学カリバ湖研究所所長
書 記	渡邊紹裕（つぎひろ）	日 本	人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授
幹 事	ニック・アラジン	ロ シ ア	ロシア科学アカデミー教授
幹 事	アデリーナ・サントス・ボルハ	フィリピン	ラグナ湖開発公社（L L D A）研究開発課主任
	ルイジ・ナセリ・フローレス	イ タ リ ア	パレルモ大学植物科学部植物生態学教授
	サンドラ・アゼヴェド	ブラジル	リオ・デ・ジャネイロ連邦大学 フィリオ生物物理学研究所助教授
	モハン・S. コダカー	イ ン ド	インド水生植物学会（I A A B）事務局長
	ダイアン・デュマノスキ	米 国	環境ジャーナリスト
	ジン・ヤンクァン	中 国	中国環境科学院水環境研究所所長
	アンデルス・ヤゲルスコフ	スウェーデン	ストックホルム国際水研究所 プログラムマネージャー
	ダニエル・オラゴ	ケ ニ ア	ナイロビ大学地質学部上級講師
	リチャード・D・ロバーツ	カ ナ ダ	国連環境計画 陸水監視計画 所長
	ファン・スキナー	グアテマラ	アティトラン湖環境保護社会協会 P R O - L A G O 副代表

太字：新しい科学委員

引退される科学委員は以下の方々である。

	氏 名	出身国	所 属・タイトル
前委員長	スベン・エリック・ヨルゲンセン	デンマーク	スウェーデン王立薬科大学教授
前 書 記	松井 三郎	日 本	京都大学名誉教授
幹 事	ホセ・ガリツィア・ツンディシ	ブラジル	国際生態学研究所、所長
	リカルド・デ・ベルナルディ	イ タ リ ア	C N R 生態学研究所、所長
	アルベルト・T・J・カルカーニョ	アルゼンチン	アルゼンチン水資源研究所、所長
	アドハヴ・アトマラン・チタレ	イ ン ド	名誉秘書官
	エリック・O・オダダ	ケ ニ ア	ナイロビ大学教授

ILEC 科学委員会の再編成



中村 正久

(新科学委員会委員長)

国際湖沼環境委員会（ILEC）は世界の湖沼環境が急速に悪化していることが国際的に未だよく知られていなかった1986年に設立された。湖沼環境の保全には科学的な調査研究を反映した幅広い社会の取り組みが不可欠であるため、ILECに科学委員会が設置されることになった。科学委員会の役割は、世界の湖沼の様々な調査研究の成果をとりまとめ、湖沼環境保全に役立てる活動に取り組むことであった。当初10年は、研修・教育や意識の向上に活用する教材作りとその国際的な普及に尽力した。また湖沼会議開催や世界湖沼のデータブック等の出版などは、その取り組みを後押しするものとしてILEC

事務局が中心となって推進してきた。

次の10年が始まってしばらく経った90年代後半頃から世界の淡水資源問題がクローズアップされ始め、ILECもその国際的な議論の場に参加するようになった。科学委員は、湖沼のような「静水(lentic water)」を含む河川流域の管理は、「流水(lotic water)」のみで出来上がっている河川流域の管理には無い困難な問題を含んでいること、また、水資源管理における貯水や取水のほとんどは静水を扱うから、多くの河川や他の淡水資源の管理に湖沼流域管理の経験が重要な示唆を与えることを主張するため二つのグローバル・イニシアティブに取り組むことにした。その一つは世界湖沼ビジョン（World Lake Vision, WLV）であり、もう一つは統合湖沼流域管理（Integrated Lake Basin Management, ILBM）である。別掲の前委員長スベン・ヨルゲンセンのメッセージは、ILECが提唱する世界湖沼ビジョンを更に発展させる必要性を強調している。

ILBMは'03年から'05年にかけて、地球環境ファシリティ（Global Environment Facility, GEF）の支援を受けた湖沼流域管理イニシアティブ(GEF-LBMI)プロジェクトの成果に基づいて推進される

ことになった。ILBMは、湖沼とその流域の自然科学的な特徴を踏まえ、その管理に不可欠な組織制度の構築、政策の立案、参画の促進、技術の応用、知識・情報の活用さらには資金調達などのガバナンスの主要課題をめぐる経験を幅広く集約し、そこから得られる教訓を様々な形で現実の取り組みに反映していこうとするものである。それはILEC科学委員会達の当初10年の活動の延長線上にあるとともに、WLVを具体的に推進する手立てを与えるものでもある。また世界の淡水資源問題をめぐるより大きな枠組みである統合的河川流域管理（Integrated River Basin Management, IRBM）や統合的水資源管理（Integrated Water Resources Management, IWRM）の考え方を反映するのみならず、それらに欠けていた「静水」流域資源の持続可能な利用と保全に向けたグローバルな取り組みへの展望を切り開くものとなりつつある。

今期のILEC科学委員は、これまで多大なる貢献をしてきた全ての前科学委員に感謝しつつ、湖沼という最も脆弱な淡水エコシステムとその流域の資源を持続可能な形で利用し、保全していくために不可欠なILBMの推進のため様々な活動に挑戦していくことになる。

I L E C への手紙



スベン・ヨルゲンセン

(前科学委員会委員長)

ILECが設立されて以来20年、私は科学委員として、大変充実した日々をILECと共に過ごしてきた。新しい風が必要ということで、私はILECを去りますが、世界の湖、特に途上国の湖

を改善しようというILECの考えには心より賛同しており、いつでもお手伝いさせて頂きたいと思っている。

90年代、ILECは、湖沼データベースや湖沼管理のためのガイドラインブックの作成、学校プロジェクト、湖沼管理に関する多くの研修などに力を入れた。2000年からは世界の25～30の重要な湖の変化を追跡・調査するという考えで“Lake Watch”に着手した。ここ3～4年は、途上国の湖沼問題に取り組むために新たなプロジェクトや発想が必要になり、世界湖沼ビジョンや世界銀行との共同プロジェクトがILECの活動の中心になった。今後は、中村教授が科学委員会の委員長になれるが、湖沼及びその管理に対する中村教授の情熱はILECにとって大変有益

なものとなるであろうと確信している。

ILECには、まだなすべきことがたくさんある。途上国における湖の問題は解決からは程遠い。その点で世界銀行との協力は有益である。ILECは湖沼と湖沼管理について多くの知識と経験を有しており、世界銀行がそのようなプロジェクトを実施するうえで有力なパートナーとなる。またILECは引き続き世界湖沼ビジョンの仕事を続けるべきである。世界湖沼ビジョンは、途上国が湖沼管理を進める上で、素晴らしい基盤となるものであるが、さらに日常の実践的な湖沼管理との架け橋が必要である。私は、Rast及びTundisi両教授と共に、世界湖沼ビジョンを実践的に活用するためのガイドブックを作成している。インドの世界

湖沼会議で草案について議論し、有益な御意見を頂いたうえで2008年末までに出版したいと考えている。

ILECは、途上国における世界湖沼ビジョンの実践を支援すべきである。世界湖沼ビジョンのフォローアップとして、途上国の湖について湖沼管理の改善を支援すべきである。このようなプロジェクトの成果を積みあげていけば、他の途上国にも普及していくであろう。これらの成果の上に、ILECは

“世界湖沼ビジョンの適用“という研修プログラムを開講すれば、ILECの最も重要な使命である「途上国の湖沼管理支援」のために、有効に情報を伝えることが可能になるであろう。世界銀行との共同プロジェクトの報告書は、多くのアフリカの湖において湖沼管理に関する情報や教育の欠如が、湖の改善を遅らせている原因であるとしている。これを解決することは、将来ILECの大きな仕事となるであろう。

私がILECの科学委員をしていた20年の間に多くの事が達成されたが、まだ解決されるべき諸問題が残されている。ILECの皆様には、引き続き湖沼管理、特に途上国の湖沼をより良くする真剣なご努力を続けられますようお願いするところである。

スベン・ヨルゲンセン
(コペンハーゲンにて)

世界の湖

フセインサガル湖の環境保全 (インド、ハイデラバード)

モハン S コダカール
インド水生植物学会事務局長

はじめに

フセインサガル湖は、二つの都市(ハイデラバードとセカンデラッパ-

ド)の間にある美しい湖であり、工学技術の素晴らしい成果であるとともに、巨大都市の自然と文化の象徴である。同湖は、今から450年以上前の1562年、

主として飲料水を貯えるために建設されたもので、湖の面積は275km²、都市化や工業化がかなり進んだ地域にある。





今日では湖の周囲は一大レクリエーション地域に変貌した。最も大きな呼び物の一つは湖の中央にあるGibraltarの岩の上に威風堂々と立つ仏陀の像である。この像は、高さ18m、幅5m、重さは450トンあり、ハイデラバードを世界の観光名所のひとつにした。

清廉だった湖が全面的に汚れてしまったのは、無計画な工業化や都市化の結果、未処理の家庭排水や有害産業廃液による汚染が進んだ結果である。広範な劣化は明らかで湖は縮小し、侵食、超富栄養化、大規模な地下水汚染、生

物多様性の喪失、病原性媒体の繁殖、頻繁な魚の大量死、憩いの場としての価値低下などが起きている。汚染の最大の被害者は、漁師、小規模酪農家、洗濯夫の住民など、湖に依存している社会の弱者層の人たちである。今日、湖はひどく汚れており、“水上および水に接触しない”娯楽の場としての利用が大半である。

湖の保全

フセインサガル湖保全の歴史では1990年に始まった住民運動“湖を救おう”が有名である。この運動を受けて行政が対策を取るようになり、州政府はハイデラバードの内外で湖の保護と保全のための総合的な取り組みを開始した。その一つが“ハイデラバード環境保全プロジェクト”であり、多くの再生施策がこの25年間に実施され、フセインサガル湖の周囲は憩いの場、双子都市の社会文化的な陸標に生まれ変わった。これらの対策には、1) 湖の周囲に3つの公園、緑地帯、憩いの場を設置、2) 湖岸の侵食防止のための道路建設、3) 下水や産業排水の流入阻止と下流域への分水、4) 湖の水量確保のために2万トン・日の下水処理

場の建設、5) 廃棄物対策、6) 湖沼保全の取り組みへの住民参加、などが含まれる。しかしこれらの対策には水質という基本的な問題に取り組んでいない。また湖は次第に小さくなり、保水容量も減少しつつある。

これらの問題に取り組むために、日本国際協力銀行の資金援助を受けたプロジェクトでは、1) 5ヶ所および既存の処理場の上流での下水の流入阻止と分水、2) 新たに5万トン・日の下水処理場の建設、3) 累積した栄養分や毒性物質を除去するために5つの流入ポイントでの浚渫工事、4) 固形廃棄物汚染を防止するための流域住民主体の廃棄物管理、5) ありのままの自然保護のための藻類や大型植物の域的な刈り取り、6) 水産業の導入、などの対策が提案されている。

終わりに

フセインサガル湖は、適正な自然保護の原則に基づいて保全の努力が進められているはじめての都市湖沼の一つであろう。ハイデラバード都市開発公社（HUDA）が実施している湖沼保全モデルは、南アジアの都市湖沼保全の方向を決めるものとなるだろう。

「統合的湖沼流域管理」に関するJICA研修コース

湖沼環境保全のための研修プログラム「統合的湖沼流域管理コース」が11人の研修生を迎えて2008年1月15日に始まった。この研修は10週間に及ぶ研修で日本国際協力機構（JICA）が主催し、ILECが実施しているものである。この研修コースは、15年間にわたって実施されたJICA水質管理研修コースの終了を受けて2006年から始まり、今回で3回目となる。

研修は、湖沼流域の管理を担当している発展途上国の政府の中堅職員や上級研究者を対象とするもので、参加者は、統合的湖沼流域管理を実施するために、地方、地域、国、国際的な取り組みを学習する。

研修は、研修生が自国で実施可能な湖沼流域管理の計画を策定できるようになることを目標に、講義や現場視察を組み合わせたもので、総合的に学べる



ように構成されている。

この研修は、前琵琶湖研究所所長で科学委員会の委員長である中村正久教授の指導のもとで実施されている。本年は総合地球環境研究所の渡邊紹裕教

授が協力者として加わった。また2007年までILECの主任研究員であったトーマス・バラートル博士が技術コーディネーターを務めている。

第12回世界湖沼会議 I L E C主催セッション



それぞれのレベルでの発見や意識啓発は湖沼や湿地の環境保全に向けた第一歩として、重要かつ有効な活動であることを述べられた。

すべての発表事例が自分たちの体験に基づいたもので大変有意義なものでした。日本からはNPO法人びわこ豊穣の郷（滋賀県守山市）の参加があり、丹堂川でのこどもを対象とした環境教育活動について、日下部純子さん、植谷正紀さん、宮城亜由子さんの3名が発表されました。地域が異なるとその背景にある文化や風習も異なることから、参加者から「なぜ、こどもが実際に魚にふれることが大切なのか？実際に触らせることの意味は？」といった質問もあり、3名の発表者はそれぞれの思いを含めながら回答されていた。

このセッションでは、教育や意識啓発が湖沼や湿地の持続的な環境保全のためにいかに大きな力を発揮するものであるか、ということが再認識された。セッションにはインド政府の環境森林省からも参加があり、NGOや市民の活発な取り組みの様子とその活動成果の発表を聞き、民間の活動にも学ぶものが非常に多くあるというコメントを残す方もおられた。セッション終了後にも、会場となった部屋の内外において、個人的に意見交換や質疑応答がなされたり、連絡先を交換したり、談笑するなどの光景がみられ、地域・国・分野を超えた交流もあった。

ILBMラウンド・テーブル

I L E Cは11月1日に統合的湖沼流域管理（ILBM）の推進を目的にラウンド・テーブルを主催しました。セッションは、中村正久教授（ILEC科学委員長、滋賀大学環境総合研究センター長）の司会によって進められ、ILBMの推進に向けて世界的規模の協力体制をどのように構築するかを中心にした議論がなされた。多くの参加者からは、ILBMをさらに普及させるためには、計画や評価のツールとしての活用を含め、ILBMの利便性をさらに明確にすること、もっとわかりやすいILBMの普及資料を作成すること、などの必要性が指摘された。また今後の普及に向けて、持続性のある資金確保のしくみや制度変革手段の開発、国及び地域の政策決定能力の向上、技術の可能性と限界の明確化などILBMのさらなる研究が必要であることが確認された。さらには、研修教材・モジュールの内容、ILBM自己学習ツールや知識データベースの開発（“LAKES”など）についても参加者から多くの意見が寄せられた。

ILBMの普及に関する議論の中では、特にIWRMとILBMを明確に区別してアピールする必要性が挙げられました。湖沼のもつ特徴が、河川やその他の水源のそれとは異なることを明確に訴えていくことが重要であるという意見もありました。また、アフリカにおけるILBMの実施については、良好な

ガバナンスや能力開発の点で克服すべき点が多いことも見えてきた。最後に、第13回世界湖沼会議（中国・武漢市、2009年11月開催予定）においてILBMセッションを開催することが提案された。

環境教育セッション

10月29日にはILEC主催の環境教育セッションが開催された。セッションは、滋賀県立大学の井手慎司教授の司会で進められ、アルテナ・チャッテルジー博士（インド）の基調講演に続いて環境教育活動に従事するインド国内外の個人やグループの発表があり、その後質疑応答や議論が交わされた。博士は基調講演の中で、大人・こどもの



2007年 ILECの主な活動

1～3月

- 水質改善研修
(1月8日～14日、UNEP-IETCとの共同プロジェクト)
- 第3回湖沼流域管理研修の開催
(1月15日～3月16日、国際協力機構からの委託)

3月

- 「世界湖沼ビジョン行動集」発行

5月

- 平成18年度円借款事業事後評価業務ボパール湖保全・管理
第2回現地調査 (5月1日～17日、国際協力銀行委託)

7～8月

- こども環境教室の開催
(7月25日、8月4日、30日、平和堂財団後援)。

- 平成18年度円借款事業事後評価業務ボパール湖保全・管理
第3回現地調査 (8月8日～9日、国際協力銀行委託)
- 第12回世界湖沼会議キックオフ会合 (8月12日)
公開セミナー『世界湖沼ビジョンから統合的湖沼流域管理
へ』を開催 (ストックホルム)。 (8月17日)

9～10月

- 第8回水環境教育研修の開催
(9月3日～10月19日、国際協力機構からの委託)

10～11月

- 第12回世界湖沼会議の開催
(インド、ジャイプール、10月28日～11月2日、インド政
府森林環境省と共催)

いつもご寄付・ご協力ありがとうございます！

ILECの活動にご賛同いただき、毎年、継続的に寄付をお寄せくださっている、または職員を派遣頂いている企業・団体をご紹介します。この場をお借りして改めて感謝の意を表しますとともに、頂戴した善意を世界の湖沼環境保全につなげる努力をお約束します。

(敬称略、五十音順)

綾羽(株)、近畿労働金庫、湖東信用金庫、(株)滋賀中央信用金庫、(株)滋賀ディーシーカード、(株)セントラルファイナンス、東レ株式会社、フェリシモ事務局、平和堂財団



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE

—事務局—

〒525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 (財)国際湖沼環境委員会
TEL. 077-568-4567 / FAX. 077-568-4568 E-mail : info@ilec.or.jp